

第2分科会 第1分散会

「心とからだの健康づくり こころの健康」

共同研究者 大正大学カウンセリング研究所

西牧 陽子

助言者 埼玉県聴覚障害者協会

大橋 啓美

司会者 京都市聴覚言語障害センター

篠田 あゆみ

たましろの郷

福泉 亜久理

<はじめに>

昨年度の埼玉大会に引き続き、ほぼ同じ顔ぶれで司会、助言者、共同研究者を務めさせていただけたことから、昨年の検討課題を盛り込みながら討議が繰り広げることができました。

昨年、この分科会のテーマである「こころの健康」は、利用者自身について理解を深め、支援につなげる視点だけでなく、よりよい仕事をしていくために、支援者側の“こころの健康”も検討の対象としていく必要があるのではないか、との問題提起で終えました。また今後の課題として、入所施設に限らず、幅広い現場からの実践報告が期待されると結びました。すると今年は早速、入所施設・生活介護施設・就労継続支援B型施設・特別養護老人ホームと実践の場もさまざま、対象者の年齢も20代～70代まで、幅広い世代の方に対する支援実践の報告がなされ、大変嬉しいことでした。また今回画期的なレポートとして、支援者が陥りやすい課題からいかに脱却していきけるか、自分自身の実践を振り返りながら考察した報告もあり、大変刺激の多い時間となりました。フロアの参加者は、現場の職員だけでなく、通訳者や相談員・ヘルパーなど職種も様々で、専門とする領域によって考え方や感じ方も異なるため、より多角的な視点から活発な意見が出されました。

今回の分科会では、“誰にとっての支援なのか”をキーワードに、当事者の立場を想像しながら「当事者が少しでも生きやすくなるには」とい

う視点でレポートを検討していきました。以下に、各レポートの概要と検討内容をご報告します。

<各レポートについて>

1本目は、通所施設である「春里どんぐりの家」の木戸さんより、作業中に施設を飛び出していってしまう20代男性の仲間に対する支援を軸に、節目ごとで支援者側がどのように感じ考えて支援を展開してきたのか、失敗したことも含めて実践を振り返り、支援者側のジレンマとそこから脱却するために、哲学や経済学の考え方も用いながら考察したことについて報告がありました。

支援に行き詰まった時、最終的に「このケースは難しい」として、支援者がその先を考えることをやめてしまう危険性を指摘されました。一見、対象者が問題行動を起こしていることが、支援者側の不安を減らそうとてなされた働きかけによって、新たな問題行動を引き出していることもあると、勇気のいる発言がありました。支援者側が考えた支援は、「誰のための支援か」とたえず自己省察することが、支援の行き詰まりから脱却するための鍵であると示唆されました。

2本目は、京都市西ノ京障害者授産所、青空工房の田中さんから、就労移行支援を利用されている統合失調症と発達障害のある50代女性との関わりと、チームで気持ちに寄り添いながら支援している実践の発表がありました。

生育歴からは、きょうだいと差別され、母親に受け入れられた経験が乏しく、常に良い子でなければいけない思いにとらわれていることが窺われました。それゆえに、金銭管理や家事援助等の生活全体を見据えた支援が必要だと支援者側は考えるものの、ご本人は今の自分の状況を受け入れられていない部分があり、どこまで手を出していいかと支援者も迷いながら一生懸命に寄り添っている様子が報告されました。

参加者からは、ご本人と支援者側と、伝えたい内容がお互いに伝わっているのかを確認したり、落ち着いて自分の行動を振り返り整理できるように、お互いに話した（筆談した）内容を保存しておく方法や、気持ちを引き出すために、ろう職員との関わりを増やしてみたらどうか？とアドバイスがありました。発表者の田中さんが、支援者として温かい目線で見守り続けている様子を感じられて、家族の代わりにはなれないけれど、力になりたいという想いが伝わってきました。

3本目は大阪府の障害者支援施設、なかまの里の奥村さんから、ろう学校卒業後一般就労し、その後作業所に通所・短期入所を経て入所4年目となった女性が、不随意運動があることで過度の支援を受けADLを低下させてしまい、薬や人に頼る気持ちを育ててしまった例の発表がありました。施設に入所し、支援者が共通の目的をもって支援を続けることで、自治会の会長や製菓作業を担当して役割を持ち、薬の管理も看護師にお願いすることで、安心して自分らしい暮らしを取りもどしていくことができた報告でした。

今後の目標をご本人と共有していくために、実際にグループホームで生活している人たちに様子を教えてもらって想像できるように支援していく方法や、一方的に伝えるのではなく課題を一緒に探す作業をしたらいいかもしれない、などの意見が出ました。

支援者によって、できることをできなくしてしまうこともあることを気付けたこと、また細く長く支援を続けていくために、一緒にできることを共に整理することで、ご本人だけでなく、支援者

の心構えにもなっていくことを確認することができました。発表者の奥村さんが迷いながらも、なかまと一緒に進んでいる姿が印象的でした。

4本目は、埼玉の特別養護老人ホーム、ななふく苑の井上さんから、ろう学校中学部を卒業し一般就労した後、聴者だけの音声によるコミュニケーション環境の中で生まれたストレスや不安感により統合失調症となり、長く入院生活をしてきた70代の女性が、自分らしい生活や気持ちの引き出し方を、職員も一緒に模索していく取り組みの報告がありました。

「家に帰りたい、お姉さんに会いたい」という切実な願いを実現させるために、支援員の他にケアマネ・後見人・家族・看護師が相談し、担当支援員と一緒に新幹線に乗って生まれ故郷まで行くという、斬新な取り組みをされました。故郷で実際にお姉さんと交流する様子を傍らで見て、今回のレポート資料を作成する中で、ご本人のこれまでの来し方と支援を振り返ることで、改めてご本人について捉え直すことができたとおっしゃる井上さんからは、ご本人に真摯に向き合おうとする姿勢が窺われました。この事例のように、ご本人の望みが叶う取り組みを他の事業所でも取り組んでいけたらと、フロアの参加者からも大変参考になったとの感想がありました。

<支援する人が元気であるために>

4本のレポートを通して、改めて支援者のこころの健康に必要な要件を、全体で共有しました。

- ① 一呼吸おいて、誰のための支援なのか、客観的に考えるクセをつける。
- ② 支援者同士、気持ちをフォローできる体制をつくっておく。
- ③ お互いに（利用者・支援者ともに）、いいね！の評価ばかりでプレッシャーを与えずに、休む必要もあることを理解する。
- ④ 困った時には一線を引いて、次の人のバトンタッチすることも方法の1つ。

<全体のまとめ>

施設や現場の職員が頑張っている、周囲からの理解が得られにくく、活用できる社会資源が少ない実情があります。課題を整理し、社会に問題を投げかけ、地域で理解者を増やしていくネットワーク作りが必要です。来年はぜひ、在宅支援の現場からレポートが出て、地域でどのように支援していくのか検討できることを期待します。